

戦後知識人の軌跡から学ぶもの

『田沼肇全活動 付・田沼肇著作集[DVD]』

田沼肇全活動・著作集編集委員会 編
日本評論社 2011年 定価9,975円(税込)

●戦後知識人像―二つのせめぎ合い

時代閉塞の反映だろうか。戦後民主主義知識人批判が各分野で行なわれている(竹内洋の著作など)。他面、戦後の平和と民主主義運動を支えた知識人の姿に、この数年、実証的に新たな光を当てる仕事も生まれている。例えば丸浜江里子『原水爆禁止署名運動の誕生』(凱風社、二〇一一年)に描かれた知識人像はその代表的なものの一つである。若手研究者に見られる五〇年代研究ブームにも、そうした側面が見られるのではないか。

一方で戦後知識人の全否定の傾向。他面において、その役割を積極的にとらえかえそうという動き。この二つがせめぎあっているのが現状である。そうしたイデオロギー状況なかで、田沼肇(一九二六―二〇〇〇)という戦後マルクス主義知識人の全活動を概観することのできる本書は時宜にかなったものと言える。田沼は社会政策、労働問題、平和運動に深くコミットし、発

言を続けた知識人である。本誌との関わりでは、田沼が公務労働運動の担い手たちを励まし、積極的問題提起をし続けてきたことも付け加えておきたい。

戦後民主主義思想、左翼運動思想のなかに、未熟な側面が少なからずあったことはリアルに直視されなくてはならない。にもかかわらず、それを土台にせずして、新しい思想形成の礎を築くことは不可能ではあるまいか。

田沼の全体像を把握することは評者の力では到底なしえない。ここでは「全活動」と著作集(DVD)の一部をあわせ読むことによってえられた断片的感想を記すにとどめたい。

●全活動

本書の特徴は、田沼の「全活動」をとらえる企画のユニークさである。詳細な執筆年表、労組・民主的組織の講師・助言活動、そして原水禁運動、日フィル支援、革新懇運動の活動が記録され、さらに関係者の証言が盛り込まれている。付録として田沼の著作集(DVD)がついていて、田沼の

ほとんどの論文、座談会等での発言、講演録を読むことができるのも、ありがたい。本書は、伴侶であり編集者であった田沼洋子氏の卓抜な発案である。また、田沼の生涯の仕事を調べあげて目録にし、膨大な文章を著作集に収録された方々の労苦に敬意を表したい。その方々のおかげで、田沼肇の戦後行動の全貌が初めて我々の目の前に開示されたことの意義は大きい。

田沼の活動が実に多領域に及んでいることに驚かされる。その活動・軌跡そのものが、戦後マルクス主義知識人の典型であり、その集中的表現といっても過言ではない。著作集をいくつか読むならば、戦後日本の重要な論点に「専門」の枠を超えて果敢に切り込んでいった一人の左翼知識人の活動を追体験することができるのである。さらに、いわゆる「著作集」だけでは、田沼の知識人としての多面的な「機能」を明らかにすることはできない。本書は「全活動」に光を当てた点で、従来にない戦後知識人論のアプローチを含んでいる。この種の本は多くの場合、専門研究者だけの閉鎖的な本になりがちである。しかし本書に

は運動の渦中で奮闘している田沼の関係者たちが執筆、証言しているのが特徴である。これによって、田沼という知識人の存在が、社会運動の（そしてそこで織りなされる）「関係性」において浮かびあがってくると思われる。そして本書に収録されている証言からは、果敢な論争家であり学問的には厳格だが、誠実で、心優しい田沼の人柄が伝わってくる。

●現場へ、そして運動とともに

本書からどのような田沼の個性が浮かび上がってくるだろうか。印象的なのは現場を重視する姿勢である。それは敗戦直後、一九四六年の東大社会科学研究会による壕舎生活者の生活実態と与論調査に既に見ることができる。当時、東大経済学部（の学生であった田沼は、その共同研究の書に「壕舎生活者の動向」という論文を掲載しており、こうした貴重な資料が著作集に収録された意義は大きい。その後も統計学を武器にしつつ、積極的に調査活動が展開された。

そうした姿勢は社会運動の「現場」への深いコ

ミットに通じる。労働問題、平和運動、統一戦線論など、多領域での理論活動のどれについても、社会運動の現場との密接な関係性を示している。学術論文とともに、総合雑誌や戦後生まれた多様な運動メディア（政党、労働組合機関紙等）に啓蒙論文を多数書いているのも特徴的である。運動体での講演活動の活発さが印象的だ。「戦後」左翼知識人としての重要な特質であろう。

●思想形成の特徴―五〇年代の労働運動、原水爆禁止運動との出会い

田沼の思想形成についてもいくつか示唆された。最終講義には、戦争体験の重さが語られている。同時に、本書を読みながら、田沼における五〇年代の経験の意義の大きさを感じさせられる。五〇年代の労働運動、原水爆禁止運動の高揚―この二つの運動との出会いが、田沼の生涯を決めたと思われる。

さらに五〇年代の科学運動（民主主義科学者協会（の活動））が、その後の田沼の仕事の規定しているとも感じさせられた。本書はそのことを想起さ

せる資料が収録されている。共著、編著が多く、共同研究の組織者としての田沼の一面を表現している。大原社会問題研究所の役割も、田沼のような研究者が生まれていく基盤として大きいのではないか。

●労働問題研究―階級論と労働運動論

田沼の研究は統計学をはじめ多領域にわたっているが、そのなかでも中心軸は労働問題研究だと思われる。階級論、社会政策、労働運動論の三つの領域にわたって理論活動を行なっている。詳細は本書所収の嶺学論文が的確に田沼の研究者としての業績をまとめている。ここでは、田沼の戦後マルクス主義、社会運動論との関連で重要だと考えられる論点をあげておきたい。

階級論では、マルクス主義の原則的な立場から、五〇年代の中間階級論争、大衆社会論争に参加している。田沼にあって階級論は、日本社会変革の方向を指し示す見取り図であり、具体的な労働運動論、統一戦線論を展開する基礎ともいえるべき位置を示していたと考えられる。労働運動を

田沼肇全活動

付・田沼肇著作集



「国家独占資本主義下の労働政策」との対抗関係でとらえる視点も重要である。政治闘争と経済闘争の結合が重視され、労働運動を政治変革との関連で考察している点特徴的だ。具体的な運動論では、社会党・総評ブロック、民同系理論との対決姿勢が鮮明である。田沼は六〇〜七〇年代における堀江正規、戸木田嘉久、中林賢二郎ら「階級的労働運動論」グループの一翼をなしていたと考えられる（この集団の業績は大月書店『労働組合運動の理論（全七巻）』（一九六九年）に結実する）。印象的なのは、民間大経営における右派潮流のヘゲモニーに対抗して、どのように左派労働運動を再構築していくかについての田沼の模索である。

労働運動論の領域での地域労働運動、未組織労働者の組織化、中小企業労働運動への田沼の分析である。今日に至るも、

その提起には継承されるべき論点が含まれていられると思われる。公務労働運動への発言も重要である。

一貫して、労働戦線の統一問題について発言し続け、特に八〇年代前半には、このテーマでの発言が目立つ。この時期は、平和運動とともに田沼の理論活動の高揚期となっている。

氏の労働問題研究の視界はマルクス主義の立場からのジェンダー論にまで及ぶ。社会政策研究の専門分化の現状を見るにつけ、多領域に視野を広げ、それらを有機的連関のうちに把握した田沼の総合性の意義は大きいのではないか。

●平和運動、原水爆禁止運動

田沼は労働問題研究と同時に、平和運動、原水爆禁止運動、被爆者運動に深くコミットし、多くの発言を行なった。マルクス主義の立場から、平和運動を理論的に検討し、反帝国主義平和運動論を展開している。同時に平和運動家として、時代に対応した実践的平和運動論を模索した。

田沼において特筆されるのは原爆被爆者運動

との関わりであろう。「被爆者を友とする」という言葉は印象的である。救済と同時に、人間としての真の連帯を志向した田沼の姿勢がうかがわれる。田沼にとって被爆者との連帯は「生き方」の根幹に関わっており、この点は氏の晩年の「最後の闘い」を支える精神的基盤になったと考えられる。そのことは、闘病生活中に被爆者支援運動や被爆者たちの生き方への思いを綴った九〇年代のエッセー（『原水協通信』掲載、著作集に収録）からうかがうことができる。

「全活動」には被爆者問題に関連して、自治体要求をどう位置づけるかをめぐる田沼の探求が紹介されている。平和運動における自治体改革重視への経過が語られていて印象的である。さらに山村茂雄の文章では、六〇年代前半の平和運動と文化（運動）との深い関連が、田沼への深い理解、友情とともに、きわめて興味深く証言されている。

●労働運動と平和運動、二五条と九条の結合―
その今日的意義

田沼は労働運動と平和運動をバラバラに研究したわけではない。むしろ両者を統一的に追求しようとしたところに、氏の貴重な理論的かつ実践的遺産があるのではなからうか。田沼ほど、平和運動に深くコミットした労働問題研究者はいなかったであろう。その意味で、田沼は「戦後革新知識人」の典型だったと思われる。

憲法九条と二五条両者の結節は現代的なテーマである。田沼はこの二つの領域にまたがって理論活動を展開した。労働者の生活との関連で一五年戦争をとらえかえた研究はその点で印象的である。さらに田沼が、社会政策研究と原爆被爆者支援について、両者の連関を探索している点も重要である。ただし、これらの統一的追求の作業は、労働運動と平和運動との結節とともに、「未完のプロジェクト」であり続け、読者に課題として投げかけられているのではなからうか。「新しい福祉国家」が提起されている時代に、田沼のこの九条と二五条を同時追求した姿勢を継承・発展させる必要があるのではなからうか。

●二つの魂―理論的原則性と統一戦線の志向

現代的な統一戦線の追求は、田沼にとって、生涯を通じた一貫したテーマだったのではなからうか。五〇年代後半以降、統一戦線論への追求が開始され、共産党の六一年綱領を基礎に、さらに具体的に展開された。それは氏の生涯にわたる平和運動、晩年の革新懇運動への追求に関わってくる。五〇年代からの平和・民主主義運動、そしてそこへの革新政党、労働組合のコミットのもつ歴史の意味を、田沼は理論化しようとしたかに見える。この広範な統一戦線思想、そしてその具体化への志向にこそ、田沼の労働運動から平和運動にまたがる広範な理論活動、実践活動の要があったのではなからうか。

一方でマルクス主義の立場からの理論的原則性、他方で広範な統一戦線の追求。この二つの魂が、相互に支えあい、そして時に葛藤しながら運動し続けたのが田沼の学問的生涯ではなかったか。とりわけ葛藤が表面化するのには原水禁運動八四年問題だと考えられる。「全活動」からは革新政党と大衆運動の自立性との関係での田沼の苦

悩が垣間見られる。親しい被爆者のもとを訪れ、苦悩の胸のうちを明かし涙したエピソードも紹介されている。人間・田沼肇の素顔の一端に触れる思いである。田沼の原則性と平和運動における統一戦線への願いが、つまり二つの魂が引き裂かれる状況だったのではないか。その意味で、同じく反核平和運動にコミットしたマルクス主義歴史学者・江口朴郎との比較検討も思想的課題である。

理論的原則性と統一戦線志向。二つのテーマを大らかに統一していくこと。そのためにも、マルクス主義理論そのものを組み替え刷新していくことは、今日なお、次の世代に課せられた課題ではなからうか。

●時代の制約

田沼の旺盛な理論活動といえども、時代の制約を受けていたことは直視しなくてはならない。大衆社会論争、中間階級論争、貧困化論、福祉国家論批判での田沼の言説にそうした制約はあらわれている。現代日本の大きな社会変容（高度成

長)を日本のマルクス主義はとらえそこなった側面があり、田沼もその例外ではない。労働運動論としては、総評、民同左派への批判のあり方、六〇年代の反帝平和運動論も今日的には限界を免れない。そしてこうした限界は、原水禁運動八四年問題の悲劇のなかにも影を落としているかに見える。田沼の政治変革への視点は、「専門」を超える広大な視野を保障しつつ、他面で「政治主義」という負の側面を孕まざるを得なかったことを冷徹にみつめなくてはならない。

●視点の深まり

しかし同時に、読者が「全活動」「著作集」を注意して読むなら、田沼の理論・運動論には深化の過程が見られる点も注目されるのである。評者は、運動の展開と連動しつつ、それが七〇年代から始まっていたとの印象を抱く。いくつかの論文から先進国における民主的変革論と労働運動論の新たな展開に田沼が深く関わっていることが伺われる。平和運動でも、被爆者運動の高揚、NGO運動の広がり、国連への積極的な働きかけなど新

たな運動展開が見られ、それを背景として原水爆禁止運動の原点に立ち返っての、新たな統一へのうねりが下から生み出された。七七年の再統一はその成果であろう。この時期に、田沼の平和運動に関する理論活動も旺盛になり、それまでの平和運動論の枠を突破する側面も見られる。それだけに八四年問題の苦悩の深さが推察される。

さらに晩年の仕事には新しい思索の芽が見られる。本書では、親友であった上田誠吉氏が晩年の田沼における「視点の深まり」について言及しているが、共感できる。共同研究「労働運動と企業社会」のなかには、企業社会克服のための理論課題が整理されている。難病を患った晩年の厳しい闘病生活、裁判闘争においてもまた、新たな運動思想の芽生えが含まれていたのではないか。そこには生存権思想の深いとらえ返しが孕まれていると考えられる。労働問題と被爆者運動にコミットしてきた田沼の総決算ともいえるべき闘争であり、この二つの領域が収斂していく晩年の闘いではなかったか。被爆者たちとの共闘が、身をもって実践されていたことを見るができる。最終講義

では、社会政策論を、かつてなく広い視野から位置づけなおすことの必要性が提起されていて示唆に富む。九条と二五条を現代的に深く連関づける視点の深まりが予感される。この延長上に、いかなる社会構想と運動論が形成されうのか。共同の討論が求められる。

●教育活動―知識人と活動家

理論が大衆をつかむとき、それは物質的な力となる。しかし、そのためには媒介者としての「活動家」の存在が不可欠である。そして戦後の活動家たちをつかんだ理論家・教育者の一人に、田沼がいる。「全活動」を概観しつつ、田沼における労働者教育論の問題意識の強さが心に残る。本書の一つの特徴は、職業的活動家による証言のウェイトが高いことである。労働組合、社会運動における書記、事務局を大事にした田沼の作風は印象的だ。田沼の左派運動家への影響力の大きさを物語る。活動家を「有機的知識人」に鍛えていこうとする問題意識を田沼はもっていたと感じる。田沼の疲れを知らぬ行動を要請したのは、他

ならぬ無名の活動家たちではなかったか。本書のもう一つの主人公は、田沼の全活動をとおして浮かび上がる戦後革新の活動家群像だと考えられるのである。

関連して法政大学での田沼の教育活動も注目される。法政大学は二部も含めて、伝統的に左派学生運動の拠点であり、大学で多くの左派知識人が教鞭をとっていたこともあり、ここから多数の革新的な大衆運動の現場活動家、社会運動のリーダーが生まれた。

それは自治体労働者、教育労働者、民医連、生協、等の多領域に及んでいる。公務職場の現実に失望したとき、田沼の励ましの言葉によって自治体労働者として活動する意義をとらえ返し、活動家として再出発した女性の証言は印象的だ。田沼との関わりのなかで運動体の専従層も多数輩出されている。田沼が活動家主体形成の上で重要な役割を果たしたであろうことが、本書の中で示唆されている。

こうした大学の役割が大きな曲がり角に直面したのが大学紛争とその暴力的荒廃であった。田沼

山下耕一・評

(現代史研究者)

はその渦中に叩き込まれていく。新左翼による暴力問題に加え、八〇年代以降の大学の変化、学生運動の後退、大衆消費社会における学生の変容のなかで、学生運動と左翼知識人の結合、そして大学から社会運動への青年学生の主体形成の回路が急激に縮小していった。田沼の苦悩は深かったものと想像される。

しかし、時代はさらに大きく動いている。貧困化と日本型雇用の縮小のなかで、学生運動再生と労働運動の次世代主体形成とが共に切実な課題となり、両者を連関させる視野が求められている。そのための客観的基盤は生まれつつある。本書を通して、かつての青年活動家層への記憶を強く呼び覚まされた。今日、新たな状況のなかで、青年の主体形成を支える関係の再生が求められている。

●運動の再生のために

現代はまぎれもなく時代の転換期にある。だからこそ、戦後社会科学のトータルな総括が不可欠の作業であり、本書は、その一つの有力な手がかり

を提供するだろう。その際、田沼の軌跡は今日の時点で、広く戦後民主主義の「継承と刷新」との関連においてとらえ返される必要がある。

新自由主義の限界が顕在化している現在、田沼が体現した時代精神がもう一度、蘇る必要があるのではないか。そして新たな「理論・思想と運動の結合の枠組み」を共同でつくり上げていくことが課題である。